

西表島総合調査にあたって

西表をほりおこす会：石 垣 金 星

平成10年より始まった西表島総合調査は自然、考古、歴史、民俗、美術工芸等の幅広い分野にわたり西表島の全体像を初めて浮き彫りにした、これまでにない大変意味のある調査と言えます。各分野専門の研究者が島を歩き記録された、この報告書が将来若い研究者たちにより、奥の深い西表島の研究を更に深めていく為に大いに活用される事を期待します。

最近、学問を志す今の若い研究者と話していながら大変気になる事があります。ある日突然、見た事もない、聞いた事もない学生、研究者から調査アンケートがファックス、メール等で届き、びっくりします。急速に流行りだしたインターネット時代はこれまでの調査方法とはがらりと変わりつつありますが、自分の足で島々を、山々を歩き回るといふ調査の基本をもっと大切にすべきというのが実感です。人の顔も見えない調査や学問が一体誰の為に役に立つてあろうか？

1999年、突然起きた台湾大震災の時、西表島もゆれ動きました。台湾の友人たちへ電話を廻しつづけ、3日目に偶然にも電話がつながり大変な惨像を知りました。特に災害のひどかった台湾原住民族の支援活動に参加し、研究者として災害に直面し様々なことに出会った人類学者黄智慧氏からこのようなメッセージが送られて来ました。「学問がどれ程人々の為に役に立つか今こそ学問の真価が問われている！」・・・と、瓦礫の中に立ち自問自答と苦悩する人類学者に私は「本当の学問」を見ました。

これまで研究とは他所からきた研究者や大学の先生方がするもので、島に住む私達は調査の対象とばかり思っていたのは私の大きな誤解でした。島に住む人が自らペンを執り歴史と文化を掘り起こし、研究する目的から花井正光氏（文化庁記念物課／動物生態学）、安溪遊地（山口女子大学／文化人類学）氏が産婆役となり、1985年「西表をほりおこす会」を発足しました。そして高良倉吉氏（琉球大学／歴史学）へ話を持ちかけ、沖縄歴史研究会の若手研究者らが3カ年に及び西表島現地を歩き回り勉強した事が沢山の西表情報の蓄積となり、1988年から県文化課による祖納上村遺跡発掘調査への誘い水となりました。

仲間第二貝塚、仲間第一貝塚で知られるように四千年以上も前から西表島では人々の暮らしがあり、さらに貝斧（シャコ貝で作った斧）が発見され、先史時代に「貝斧文化」をもった人々が東南アジアの島々から移動して来た事も分かって来ました。奥深い自然と人

がどのようにつき合ってきたかを理解する為に記録したのが「西表島の動植物名」です。そして西表島の人々が何処から来たのか？キーワードが三つあります。西表島で唯一南の島から漂着して出来たと伝承される鹿川村（カヌカノカノー）、稲作儀礼で用いられる「ジッチャーン(ダンチクで作った笛)」そして「カマイ(猪)」の名称です。私の住む祖納部落ではカマイ捕り名人が多い事から「スネカマイ/祖納の猪」という愛称がついています。ところが、何故か「カマイ」の由来が不明です。2000年11月28日南太平洋諸国からやって来た皆さん方へ「カマイ」について聞いた所、ポリネシアで「カマイ」という言葉があり、「イルカ、シャチ」である事を知りました。昔々、西表ではカマイは海にいて、イルカは山にいたと伝えられます。猟を終えると最後はカマイの頭を海へ持っていき、海へ帰し、また来年も来るようにという祈願をします。はるか昔、南の国々との交流等はこれからの研究の課題とされる事でしょう。